

WINDS CAFE 350 in 目黒

打楽器百花繚乱 XIII

Mizuki AITA plays Mizuki AITA

目黒芸術家の家スタジオ

12:30 開場 13:00 開演 14:20 終演予定 (休憩なし)

ご挨拶

本日はご来場誠にありがとうございます。

自作の独奏作品による自演個展は生まれて初めてのことになります。多くの作品は最初期で2014年、最近ですと改訂作業を経て2026年の作品もあります。僕自身、作曲の脳と演奏の脳がずいぶん異なることを強く意識しており、この準備にあたって、完全に他者の作品を稽古する時と何ら変わることのない日々を過ごしました。作曲行為は、ある一瞬の時間軸を凍らせ、記し、永遠普遍のものにするという感覚があります。事実、作曲した時のことは今となっては遠い過去のことであり、こんな音を書いたのだなあ、と自分の中でも驚くような発見ばかりがあり、新鮮な気持ちで向き合う事となりました。改めて音楽にまつわるあらゆる行為について、その計り知れない魅力と重積を噛み締めるばかりです。

このような機会を与えてくださった川村龍俊さんに深く御礼申し上げます。

それでは最後までごゆっくりお楽しみください。

會田瑞樹

會田瑞樹(打楽器奏者/作曲家)

「音楽の可能性を拡げ続ける情熱の人」(野本洋介氏/バンドジャーナル 2025年12月号)

會田瑞樹は2010年のデビュー以来、常に多角的に音楽を見つめ、行動に移している。打楽器、とりわけヴィブラフォンのためのレパートリーの拡大を求め多くの作曲家との協働を通し、300作品以上の初演を通し音楽の未来を見つめている。作曲家としても打楽器作品のみならず、管弦楽、室内楽、歌曲と多岐にわたる創作活動を展開。演奏家の視座を持った「見通しの良い音楽」(北爪道夫氏)と評されるなど、その活動範囲はとどまることなく、近年は教育の面においてもその大胆な発想を活かした行動的な指導に定評がある。

1988年宮城県仙台市生まれ。幼少期よりヴァイオリンを照井勢子氏に師事。12歳で打楽器に出会い、仙台フィルハーモニー管弦楽団打楽器奏者佐々木祥氏に師事。同時期に星律子、藤本隆文、有賀誠門の各氏に音楽の基礎を学んだ。宮城県仙台第二高等学校を経て、ソリスト育成を目的とした武蔵野音楽大学ヴィルトゥオーソ学科打楽器専攻に入学し、開設以来初の卒業生となる。2014年同大学院修了。6年に渡り吉原すみれ氏に師事したほか、高橋美智子氏の薫陶を受けた。さらに学外において神谷百子氏にマリimbaを学び、打楽器独奏者としての基礎を学んだ。

2010年日本現代音楽協会主催「競奏IX」第二位入賞と同時にデビュー以降「初演魔」の異名をとる打楽器/ヴィブラフォン奏者。作曲家として2019年第10回JFC作曲賞入選、2021,2023年リトアニア聖クリストファー国際作曲コンクール特別賞を2度にわたり受賞。2022年2月には東京都「アートにエールを！」採択事業として初の自作自演個展を開催。2020年発売のアルバム「いつか聞いたうた ヴィブラフォンで奏でる日本の叙情」は年間最優秀ディスクとなる第59回レコードアカデミー賞受賞。ヴィブラフォン、現代作品の魅力を多彩に紹介した成果により令和2年度大阪文化祭奨励賞、令和3年度宮城県芸術選奨新人賞受賞。2024年、第21回イタリア国際打楽器コンクールヴィブラフォンC部門において最高位を受賞。

2025年5月、全120作品からなる世俗歌集《北原白秋のまぎあ・ぐうす》の作曲を完遂し初演。大きな反響を得、楽譜は国立国会図書館に永久保存されたほか、2026年5月には音楽之友社より歌曲選集「北原白秋のまぎあ・ぐうすセレクション」として発売が決定。8月にはサントリーサマーフェスティバル2025に初登場。作曲家ジョルジュ・アペルギス氏立会いによる演奏は「會田瑞樹がクラベスで奏でる小刻みなビートは、まるで象の巨体の上を舞う蝶のよう」(石井達朗氏/朝日新聞夕刊掲載)と評されるなど、その身振り音色に熱い支持を得た。東京オペラシティ文化財団主催による作曲家西村朗トリビュートコンサートでの名手たちとの共演による圧倒的演奏は2025年Mercure des Arts第11回年間企画賞第一位を獲得。2026年2月22日(日)午前8時10分より、NHK-FM「現代の音楽」での放送が予定されている。

活発な音楽活動に加え、2023年より千代田区立九段小学校「九段 planets」代表指導者を務め、こども音楽コンクールに二年連続参加。団員と編曲作業から作り上げる刺激的な音楽活動に注目が集まり、地域の招聘を受けての演奏活動を活発に行なうなど、演奏、創作、教育と多面的にその音楽性を発揮し続けている。

ホームページ <http://mizukiaita.tabigeinin.com>

《心臓の小太鼓 -歌唱を伴う小太鼓独奏のための-》(2024/1926)

粕江での小太鼓レクチャーのために作曲。声と小太鼓による音楽を書いてみたいと思い、色々と詩を探したところ、これ以上ないほど最適なこの詩が見つかった。

中山昌樹(1886-1944)は明治学院を卒業後、多くの賛美歌の翻訳を行なったことで知られる牧師、神学者である。この詩は『宇宙の微笑』(新生堂/1926)の中の一編であり、小太鼓の持つ勇壮さや悲哀を描き出した見事な詩であり、すぐに作曲のイメージが湧いた。小太鼓演奏と歌唱を奏者一人が独白の様に行い、この楽器の持つ様々な可能性を投影したいと願った。

心臓の小太鼓 (中山昌樹)

狭霧ふかき朝の高原を
ただひとり私は辿りゆく
花咲かず
鳥啼かず

されど心のうちの楽隊は
勇壮なる行進曲を奏し
心臓の小太鼓がこれに調をあはす

冷氣迫る夜の高原を
ただひとり私は辿りゆく
星見えず
蟲鳴かず

されど心のうちの暖爐は
こんこんと燃えつづけ
あかあかと魂の頬をほてらす

《踊れ、赤い靴》(2020)

当時レッスンに足繁く通っていた生徒のデビューリサイタルのために作曲後、自分自身でも頻繁に演奏するようになった一曲。童謡《あかいくつ》を執拗に変奏する形式を取り、これを基盤に《赤い靴の夜 ~弦楽三重奏とヴィブラフォンのために》を作曲。さらに2026年、モノオペラ《あかいくつをさがして》が7月11日に神奈川県立音楽堂での初演が決定している。この一曲がなければ、物語は始まらなかったとも言える。

《リトアニア民謡"クリスマス朝、薔薇が咲く"の主題による幻想曲》(2023)

第3回リトアニア国際聖クリストファー作曲コンクール LMIC 特別賞を受賞した同名曲をベースにしたヴィブラフォン独奏曲。本来は弦楽合奏の作品をヴィブラフォン一台に置き換えることで、響きの骨子が明確になるよう心がけた。ヴィブラフォンならではの特殊なサウンドも盛り込むことで、楽器全体の可能性も表出することを意図している。原曲となる弦楽合奏曲は日本未初演。僕自身も中継による初演の映像でしか見聞きしたことがなく、今後再演が実現できることを願っている。

《雨の生まれた日に… ～雨の降る前に、補遺～》(2021/2025)

2021年に作曲した《雨の降る前に…》をヴィブラフォン独奏のために作り替えて欲しい、という依頼を受け作曲にあたった。当時のスケッチなどを改めて読み返したが、4年の月日は想像以上に遠い隔たりがあり、侵すことの出来ない聖域のようにさえ感じられた。新たに脳裏に浮かんだのは「La danza」と銘打った断片。一聴すると明るいのだが、内実それは、空元気で、他を顧みない無機動的なハイテンションさ、漫画などで頭を打った時にクルクルと回る星型のあの、妙に苛立ちを覚える虚実な明朗さが念頭にあった。それらを紡いで行った先に、依頼のあった《雨の降る前に…》のコラールが結びついていった。

《Elegy-in memory of Shoichi AITA》(2023/2026)

2016年1月1日に祖父會田庄一は逝去した。今でも元日が来るたびに、はっきりと思い出す。心拍数が次第に乱れ、0の永遠というものを感じたあの日。生涯僕は、元日という日を浮かれて過ごすことはないだろうと思う。この作品は7年後の1月1日に発作的に書き上げたものである。再演にあたりたった一音だけ、書き加えることにした。2026年1月24日、常に口論を繰り返した祖母會田揚の95歳の誕生日その日に。

《琵琶湖周航の歌 -祖父寺田隆信の思い出に》(2014)

2014年8月11日に祖父寺田隆信は逝去した。本日演奏する作品の中で最初期のものであり、作曲の萌芽となり、生まれて初めて出版された作品でもある。二人の祖父は僕が作曲に至ることを知らずにこの世を去った。どんな言葉をかけてくれたか、と想像することもある。

《星の降る夜》(2024)

ロケットミュージック社より、中高年のソロコンテストレパートリーの充実のための作曲依頼を受け、立て続けに4作品を発表したうちのひとつ。初演はロケットミュージック社のYoutube上で公開し、今なお多くの再生回数を刻んでおり光栄に思う。制限時間4分の中で奏者の個性や技量が以下に響き渡るかを念頭に置き、夜空の星々を見た日のことを思い出しながら一気呵成に書き上げた作品である。

《一茶の俳句による打楽器のためのコンポジション》(2025)

3歳からヴァイオリンをスズキ・メソッドで習い始めた僕にとって、小林一茶は身近な存在であった。一茶と同郷である鈴木鎮一先生はメソッドの中に一茶の俳句の暗唱を推奨し、子どもたちにその味わいを伝えようとしていた。不真面目な生徒だったのでそこまでたくさん暗記はできなかったが、冒頭の「猫の子のちよいと押へる木の葉かな」はその音節の魅力も相まって、人生で初めて覚えた俳句と言えるだろう。

月日は流れ、ヴァイオリンを打楽器に持ち替えてから20年以上になる。折に触れてスズキ・メソッドで学んだことが生かされていることを感じる。創設者鈴木鎮一先生は穏やかなおじいさん時代の写真ばかりが有名だが、戦前は鈴木カルテットを結成し、当時の前衛作曲家たちの新作初演にも尽力していたこと、軍部が台頭する中真っ向から愛についての私論を雑誌掲載したこと、東京音楽学校に入学はせず教員として大活躍したこと等、熱いお人柄をひしひしと感ずるようになった。

その熱さを自分自身も強く意識して音楽活動に明け暮れていることに気がついたのである。その思いを音楽にしたいと常々思っていた。そして出来上がったのが本作品である。スズキ・メソッドで出会った一茶の俳句を中心に、様々な打楽器のサウンドがその風景を彩る。

1. 猫の子のちよいと押へる木の葉かな 膜質打楽器を中心にリズムの魅力を探る。
2. 陽炎や道灌どの物見塚 荒川区ゆかりの俳句。幻想的な断片。
3. 青い田の露を肴やひとり酒 こちらも荒川区ゆかりの俳句とされる。ほろ酔いの足取り。
4. やれ打つな蠅が手をする足をする 滑稽さを表出。
5. かりかりと竹かぢりけりきりぎりす かりかりがりがりやをスネアドラム一台で様々に表現。
6. 雪とけて村いっぱいの子もかな 一茶の人間愛が込められた句をヴィブラフォンで。
7. やせ蛙負けるな一茶ここにあり すべての楽器を用いての大団円。